
ニキル・アルバーナ ～シタールと短剣～

榊 星耀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニキル・アルバーナ ～シタールと短剣～

【Nコード】

N8201H

【作者名】

榊 星耀

【あらすじ】

剣と体術に比類無き才を誇りつつも、それを秘する影深き楽士。その彼は、天下の名奏者と謳われた老師の下、かつて天才的なシタール奏者としてその名を馳せていた。今は放浪の身。その彼に、とある藩王から祝祭の演奏者の一人として依頼が来た。彼は、長い年月その機会を待っていた。その真意は……。人の心にある光と闇が交錯する架空歴史物語。

夜語り

開け放たれた窓の外では、煌々として浮かぶ月が、遠くは眼前の山並み、近くは庭を彩る草木を神秘的に浮かび上がらせている。冷たい月光とそれが綾なす影は、雲の働きによつて定まらぬ濃淡豊かな墨絵を思わせた。

その月は満月より僅かに欠けを見せ、楕円を描いていたが、天より降り注ぐ光量は十二分にあり、外に眼をやる男には、路傍の小石すら視認できた。

たなびく薄雲が時折、月を過ぎる。その時は、わずかに虹色の暈をその身に燻らせた。幻想的な装いが、これほど月に似合うのは、月自身の性質がもたらすものである。

彼は窓辺に寄りかかつて、純粹無垢な月明かりと包み込んでくる夜気を無防備に浴している。月夜の生む、神秘性と幽玄が顕在化させられた独特の雰囲気、ひどく心を奪われていた。それはいつものことで、気が向けば、小一時間眺めやることもざらであった。

陽光に満ちた広大な草原の風景に浸るも心地良いことに否はないが、昼間の光景は、彼には少し雑然とした余計なものまでも感じられる気がした。何やら騒がしいのだ。求める所の質的な違いと表現してもいいだろう。彼にとつて、完全な鎮まりを求めるには、深閑とした夜の静寂と暗闇が必要なのだ。そして何よりも、不思議と癒しをもたらす和らげな月の光を。

確かに彼の内面には、滾る想念が渦を巻き、それが少年時代より絶えず彼を突き動かしていた。今の彼の多くを形作っているのに、その影響は決して少なくない。

彼は暗い瞳を、手元の短剣へと落とす。

鈍く輝くその面は、ダマスカス調の刃紋が複雑に浮き出ている。

彼の手によれば、この短剣は魔法を与えられたが如く、生き物のように洗練された踊りを舞う。だが、その無機質な美しさは常に冷厳

さを帯び、狂おしい死の影を漂わせた。未だ血を吸うたことは無いが、持ち主の陰の気をたらふく含んだ結果であろう。

腰に差す簡素な飾りの短剣にしては、実用性に富んだ刀身をしている。数打ちものではなく、刃姿、切れ味共に名工によるものと知れる。これは亡き父から贈られた唯一の形見でもあった。銘は、カ
ルギト。

それ故にそれは、唯一の使命を宿していた。およそ20年間、遣
い手の昏き悲愴を孕みつじつと待ち続けた。そして、その働きは
無論、剣としての本領である。

彼は問うた。

「20年間の私の思い。それ故に得てきた多くのもの。それに沿う
て、準備されし様々なこと。来るべき収束点は間近に迫った」視線
は複雑な刃紋をなぞる様に刀身の上を微かに泳ぐ。「お前は、それ
に応えてくれるか？」

自身の体術・剣捌きはもはや、天上の技だ。かの者の取り巻きが、
いかな達人と言えど、凡俗の技など歯牙にもかけぬ。が、逃げ切れ
ることも考えていない。いかな手錬でも、数の前には、死を覚悟す
ることも必要。ただ、やり遂げる確信に一分の瑕も無い。

しかし、この短剣が見掛け倒しならば、目的を達するどころか、
無為に命も潰える。

御前では、短剣を帯びることを許されるが、精一杯のところ。そ
れもこの国では成人男子の印として、ほぼ全ての階級のものが、腰
に短剣を差す慣習がある故。殺傷力の高い武器など持ち込むのは無
論不可だ。

それに対し、護衛を兼ねる側近や取り巻き連中は、必ずタワール
(曲刃刀)やカンダ(両刃直剣)で武装している。瞬間的な立ち回
りの最中、その動き故に刃を合わす可能性は僅少だが、仮に短剣が
折れてしまえば、相手は凡俗の技とはいえ、達人の域にある。無限
に全てをかわし続けることは、さすがに不可能。帰結は自明だ。

冷たい感触が額に触れる。

第三の眼と呼ばれる辺りに、カルギトをそつと抱いていた。

瞬間、脳裏で底の無い見えぬ深淵を覗き込む。

黄泉の風が耳元で、ゴオゴオと唸りを囁き始めた。

幻聴とは知れているが、全身総毛立つ。

幻覚がもたらす闇の固まりは、そこここに絶えず胎動を繰り返し、必死に何かを生み出そうともがくようだ。

湧き上がるけたたましい哄笑が、深淵を揺るがしつつ、その底でとぐる巻く何かを肥大化させていく。

身近で耳朶を打つその哄笑は、何物のものだ？いや、誰のもの？

逆巻く闇闇は、虚無ではなく、粘質な液体の圧迫感を伴っている。そして、意味不明なことをざわざわと訴え、帰る道の無い深淵の深遠へ引きずり込もうと、密かに不気味な引力を発し続けていた。

突如の

閃き

瞬き

眩み

刹那の遊離感、浮遊感。溶けゆくように覚束ぬ五感。激しい酩酊に似た感覚が波状的に襲う。

地鳴り。海鳴り。遠雷の轟き

遂に怒濤の光景が顕現する。

猛々たる狂気の支配者が鉤爪の一振りで絶望の夜界を召喚する。

暗いビロードが即座に天を蔽い、津波のように溢れ返る瘴気の爆流。地獄の苦痛と燃え滾る憎悪と血も凍る恐怖を、湖ほどもある大釜で煮詰めながら、愉悦に満ちた凄絶無比の笑みを湛える巨大な魔人たち。あらゆる滅びと共に迫り来る、錆び崩れた鋼の異形化物群

大地はことごとく穢れ、大気は色彩を失い、命あるものは普くその灯火消しゆく。其は、世の終わりを告げる物ども也……等々。

マタリの異端的文豪、イド・テルクロール畢竟の大作であるカラン三部作、その第一部「魔界群像」で描き出された光景が、鮮烈にフラッシュする。その世界を巡ったかの如き既視感の覚えは常にあ

り、その度に自身が何ものなのかと、激しい戸惑いを繰り返す。
しかし、凄まじい精神的嵐の中で、これらの幻覚的妄想？にすら
恐怖は無かった。ただ、抵抗があった。一線を踏み越えることで、
失うものの大きさを無意識に憂えていたのかも知れない……。

ゴオオオ

ゴオオ

オ

耳朵を打つ凶風が遠のく。

現実回歸。

頭を上げ、目を開ける。

神々しいほどの月姿が変わらず、そこにある。その玲瓏たる月明
かりは、精神的な高次の昇華と神秘なる鎮まりを与えてくれた。

視線を手元に落とす。下ろしていた手と共に陰に沈した刃は、も
やは何も語り掛けてはこない。ただ、冷たい感触だけがある。

彼は乾いた笑みを浮かべて、物言わぬ相棒に言葉を投じた。

「……お前は、恐ろしいほどに私の一面を映し出してくれるな」
短剣を鞘に収め、サイドテーブルにそつと置く。

その傍らには、シタールが立てかけてあった。上（主）弦7本、
下（共鳴）弦13本の二段弦構造になっている弦楽器だ。これは表
側の、とも言うべき、もう一つの相棒だった。

シタールは彼にとって、黒きうねりの中でのオアシスとも取れる
存在と言えた。それに触れる時、本来の自分でいられるような気が
するのだ。

二番目の弦、ジュリタールを爪弾く。

シタール独特の音色が、韻々と響き渡った。

シタールには、その音響的な構造故に、はまると抜け出せないような不思議な魅力がある。少年時代の彼もまた、魅せられた一人だった。

付け爪ミスラフを付けて、再び音を出す。

やはり少し下がっている。

糸巻きを調整した。

先日、弦を張り直したばかりなのだ。そうした時は、すぐに音が下がる。そのため音合わせ チューニングを繰り返さなくてはならない。合わせて下がって、合わせて少し下がって、合わせてまた少し下がってをしていく内に、音が安定してくるのである。

3番弦パンチャム、4番弦カラーチと順次調整していく。そして、5・6・7を合わせ、7・6・5の順で弾く。

ジュワワ〜ン

この音をチカリ（C#・C#・#G）と呼び、この3本が演奏の際のリズムの伴奏に使う弦である。

下（共鳴）弦は、一般に演奏する曲によって、チューニングは全て異なる。逆に言えば、同じ曲でも共鳴ラーガチューニングで雰囲気、がらっと違うものになるのだ。

ラーガ「エンティウム」を軽く弾いてみる。

冴え冴えたる共鳴が、月夜に相応しい静謐な広がりをもたらし、部屋に音響調和と叙情的高揚の風が吹き渡る。

生滅変化しない永遠絶対の真実である“無為”を歌う厳粛な「エンティウム」は弾き手を肅として選ぶという。

しかし、男の指は澁みなく、その表現力は稀代の天稟が発揮するものだった。この曲自体が積層する複雑な煌めきを余すことなく、汲み上げている。

彼は短剣のみならず、シタールにも類稀なる魔法の息吹を与えることができるのだった。

この男、名をニキル・アルバーナという。年齢は三十半ばほど、波打つ黒髪と射るような眼差しが人目を引く。そして、その拳措は貴

族さながらの優雅にして、また武人然として沈毅。澄んだ薄緑色の瞳と色白の肌が際立つ顔立ちは、彫り深く淡白に整っているものの、表情は常に憂いを帯び、儂さを湛えている。しかし、自らの楽に対する賛辞喝采には、まばゆいほどの輝きを返す。それはあたかも、分厚い暗雲が割れゆき、一条の陽光が強く差し込み始めたかのよう
に、燦然とするものだった。

そして彼は、もはや伝説的奏者とさえ謳われる老ラウディカーンの門下に籍を置き、その名は若くして世を席卷したが、元来が孤癖で放浪を好み、今や漂泊の一楽士に過ぎない。限られて知る者ぞ知る名奏者と言ったところである。

窓から微風と共に夜気がそつと忍び入る。

時が凍り付いたかのような静寂美。

空には天の船（月）が緩やかに頂を跨ぐ。

その脇を過ぎ行く雲の群れ。

其は色を帯びて姿を現しては消え行くのみ。

草木は降り来る露を柔らかに纏う。

玉なる露は、それぞれに微細な星を宿している。

闇に輝ける夜は天地双方、寶石に満ちていた。

ニキルの顔には、例えようもない穏やかな笑みが戻っていた。

夜語りは眠りなく、そして淡々として続いていく。

ランガル城

季節は乾季に入り、鮮烈な日光が容赦なく地上を焼き付けるようになる。この気候に慣れていく人々でさえ、路を行くのに軒下沿いや市場のアーケードへと足を速める。異国の旅人、特に北方の山脈の麓にある国々から来た者にとって、この暑さはさぞかし辛いものだろう。

夕日に暮れなずむ城下の街から、高さ100m程の丘に立つランガル城を遠目に眺めると、茶褐色の壁で周囲を覆われている堅固な城砦然とした様を目にするだろう。しかし、その無骨な風貌も、尖塔アーチをくぐって城内へ踏み入ると、一変して華麗な造りの宮殿が所狭しと群立しており、見る者を圧倒する。

そのファサード（正面）は繊細な彫刻で飾られ、張り出した出窓の様な部分は、ベンガル風の両隅が垂れた屋根のデザインが、基調だ。

宮殿内の装飾は、さらに華やかな色彩が加わる。連続して配置されている宮殿は、カルディ・マハル（紅玉の館）やファンタラル・マハル（天空の館）など、それぞれに名付けられて特色ある美しさを披露していた。

中央に一際大きく、威容を誇るクンサル宮では現在、他の王侯貴族が招かれ、ダージル戦勝15周年記念祝祭の宴が催されている。この戦勝により、現トウルバン国は小国から確固たる中堅国家へと地位を固めた。その後、王の卓越した手腕によって急激に成長するトウルバンは、紛れも無い大国へと上りつつあった。こうした勢いは、例によって強い光だけでなく、暗い影も引き連れるものだ。だが、今それは語るまい。

クンサル宮の大広間は、灯の光と楽音と贅沢な料理の匂いに満ち溢れ、全国各地から呼ばれた高名な踊り手や楽士、幻術師が、貴人たちの前でその技を競うように披露していた。ここで認められ

ば、彼らの評判の高さもさらに確たるものになるからだ。

評判高い踊り子のビパーシャが楽に合わせて、手や腰を流水のようにくねらせる。時折混ぜる軽やかなステップと、転回は確かに見事なもので、緩やかな踊りに上質のアクセントを添え、観る者を魅了した。彼女の艶妖な姿態と挑戦的な眼は、それだけで強い力を秘めている。そして、癖のある笑みが加わった時、何人の貴人の心を虜にして来たことか。

ニキルと言えば、要請されて特別に伴奏の一人としてこっそり参加していたが、舞踊は一瞥しただけ。淡泊に爪弾きながら、心あらずで大広間の天井にふらふらと視線を流していた。

ビパーシャの踊りは、見世物としての総合評価は、近隣諸国では随一と言って良い。

踊り手としての技量も抜き出ており、人の心をつかむ表現力も際立っていた。彼女には特有の匂い立つ華やかさがある。譬えれば、色鮮やかな大輪の花を思わせるのだ。舞う度に極彩色の輝きを吹き散らす。楽無くとも、視覚的に楽音を響かせた。

しかし、別の側面から見れば、単純に言って派手である。さらに、品が足りない。気質が、その踊りと表現によく出ていた。傲慢にすら見える眼力の強さが物語るように、踊り子としての媚びは無く、時として王侯に対してすら口調と態度に、奔放と不遜を帯びる。それを良しとせず二度と召さない者もいれば、その一種の傾き振りを珍奇に思い、大器ぶって許し面白がる領主もいた。

しかし、ニキルの目には全てが、俗物に過ぎた。かつて、あの少女の舞を観てしまつては、それも止む得なかつた。

当時、舞踊家ハシユラムの秘蔵っ子と言われていたその少女は十代半ばであつたろう。物静かで、無垢な表情がとても印象的だつた。舞の姿はすでに完成の域にあつた。無垢であると同時に、凜とした老成さが湧き上がり、爪先から指先まで躍動するように、また伸び伸びと気持ち良く踊る。時として、その躍動感が典雅なレースに覆われ、品のある不思議な落ち着きが添えられる。そして、舞う度

にえもいわれぬ清涼感が広がるのだ。

若年ゆえか芸のみに関心を持ち、無欲にただ至高を求めたその趣は、純粹清楚、可憐ですらあった。

ビパーシャが人の目を気にし、人の手によって作られた大輪の艶花なら、少女は高山で人知れず咲く孤高の岩桔梗だった。

ニキルはその気風に共感を覚え、年下であったが、踊り手としての彼女をこの上なく敬愛した。しかし惜しむらくは、病を得て、ほどなく天逝したことである。

その死は、道は違えど彼女の将来を囑目していた彼自身にも、想像以上のショックを与えたらしく、諸行無常を詠う「ラツカシユウジャ」を作曲し、その悲哀を情感乗せて吐露した。

踊りが終わり、ビパーシャは王にかしずいた。一揖して退くかと思いきや、

「戦勝記念、心よりお祝い申し上げます。

拙き踊りにて、お目汚しを致しました。斯様な晴れがましき場にて、我が舞を披露させていただく機会を賜りましたこと、殊に感謝申し上げます」

ニキルはその振る舞いに、評判倒しの物足りなさを感じたが、王を見上げるその表情を目にすることができていたならば、その考えを引っ込めていただろう。

どうだと、言わんばかりの自信に固められ、上気したその顔は、やはり無遠慮で品に乏しかった。しかし、それ以前に踊り子風情が求められもせずに、直接王に声をかけること自体、無礼千万であるう。

側近たちは無表情に見下ろし、王は微かに苦笑しつつ、黙して頷いた。

ビパーシャが退出する傍らで、共にサロードを演奏していた男が話しかけてきた。

「ビパーシャの奴、相変わらず、王侯好みの踊りを知ってやがる。あいつの不評を言うのもいるが、実際見りゃあ、踊りはピカーだよ

なあ。

「そう思わないか？」

ニキルは視線だけ向けて、頷いた。表面だけ見れば、そうだろう。「確かに、腕はある。それに、抑えるべき点を抑えれば、不評とやらも減ることだろう。ただ、彼女も無論それを知っているが、良かれ悪しかれ我を殺したくない手合い故に仕方あるまい」

「なるほどなあ。」

まあ、あんたも若いのにそこそこの腕をしているなあ。しかし、うーん、何か冷めた弾き様だ。淡々とし過ぎて、伸びが無いよ。音運びはびっくりするくらい正確なのに、もったいないぜ」

その他意の無い正直な言い様にニキルは、もの柔らかな失笑を漏らした。

シタールは踊りの伴奏、しかもその一つに過ぎない。主演奏でないのだから、脇役が主張しては駄目だ。主役を際立たせる役、守り立てる役に徹するが常道。しかし、分をわきまえぬ大抵の目立ちたがり屋は、それすら意に介さない。だから、三流の域を出ることも無い。またニキルからすれば、回りの奏者レベルに合わせることも必要だ。

それに何より、あの踊り手の伴奏とあつては、気分的に力も入るまい。

隣の男が言葉を続ける。

「それはそうと、今回の弦楽器主演奏は、ニキル・アルバーナらしい。放浪好きの為に、昨今はなかなか捉まらず、久しく表に出なかつたみたいだが、こういう風の吹き回しやら。」

世間から遠のいて、名も褪せたものの、腐っても鯛だろう。俺としては、初めての彼の演奏、幕裏ながら直に聞けるのは楽しみだな」
「再びの失笑。どうだろ？ 鯨かも知れないぜ。」

しかしあんた、すでに間近で聞いているよ、全く本気じゃなかったけどな。

喉まで出かけたが、止めた。

「一つだけ言つとくが、奴は噂以上にすごぶる捻くれ者だよ」
そう言つて、ニキルは座を立つ。

呆気にとられた隣の男は、次に始まる演奏を生涯忘れられなかつた。

ゆっくり進み行くニキルの名が呼ばれた。次は彼の番だった。

ラーガ「ダイバハル」

ラーガ「ダイバハル」の香り立つ様な馥郁たる響きが、深閑とした大広間を荘嚴に支配していた。

「大地」を意味するこのラーガは、基本的に早朝に演奏されるもので、大地への畏敬と感謝を謳うものである。その旋律は、ラーガにしては広大な音階のうねりと重厚な音回しが特徴だ。聞く者の多くは言う、「ダイバハル」の持つ非常に心地良くも深い響きが、全身から浸透するかのような感覚に包まれる、と。

時として、その物哀しくも切なく流れる旋律の本質を捉え得る者は、このラーガに秘められた大いなる「愛」を見出すだろう。

ちなみにダイバハルに使用される音の中で重要な音（主音ノヴァーデイ）は、G^ミで、その次に重要な音は、サムヴァーディンNである。

ニキルの紡ぎ出すラーガ「ダイバハル」の即興は、もはや見事の一言に尽きた。シタールはリズムを刻みつつ、旋律を奏でる上に、下にある共鳴弦が鳴り響くので、熟練したニキルの手にかかれば、とても一つの楽器で演奏しているとは思えない。まるで小さな管弦楽のような音が生まれる。

トウルバン国お抱えの一流宮廷楽士たちは、その隔絶的な凄さを知り得るが故に、畏怖の眼差しでニキルを見た。そして、その身に奔る戦慄は、羨望と抑え切れぬ嫉妬、同じ楽士としてのどうしようもない魂からの賛嘆、それら渾然の表出であった。

その表現力・技量共に、この世界では三十半ば如きの若造が、弾き出す境地ではなかったのである。

主奏者であるニキルとタブラ奏者との拍子タブラの運び具合も絶妙で、シタールが主題（決められた旋律）と即興を交互に繰り返し、タブラもそれに応じて即興と基本パターン（テカ）を切り替える。

タブラとは、左手で奏する低音のバーヤ、右手で奏する高音のタブラの大小一對を総称する打楽器である。張られた皮は山羊皮でそ

の表面に黒鉛やマンガンを塗り固めた、黒い円形の部分がついている。

タブラは主奏者（主奏楽器）の基音にチューニングするのが役割と言える。そしてタブラは、あらゆる言葉を表現できるとも言われる。

ニキルは、タブラ奏者の癖と技量を即座に見切つて、それに合わせてつつ、巧妙に実力以上の高みへと導く。二つの音が激しくも官能的に絡み合い、圧倒されるほどに研ぎ澄まされた高峰を次々に構築していた。それは、正しく雲に霞む神域の頂であった。

演奏のテンポ（速度）はビランビット（遅）に始まり、マディヤ（中）、ドウルト（速）へと上り詰めていく。そして、さらにスピードが加速されて、最終段階のジャーラーで極限まで速められる。そして、ファイナーレ

天上より零れ落ちた煌きのようなシタールの旋律は、名状しがたしい余韻を残して、終息した。

水を打ったような静けさ。

水晶のように硬質で透き通つた不純物の無い静寂は、この大広間を、壊すのをはばかられる異空間に変えてしまつていた。

誰もシタールがもたらした余韻を失いたくなかつた。その一瞬一瞬の積み重なりが、彼ら個々の心に蓄えられてきた音楽史に比類なき金字塔を打ち立てているのだ。

そう、演奏を耳にする意識と記憶は遊離し、異空を彷徨うが如く感覚は一点に集中され過ぎる。来るべき津波のような情感は、無音が構成する余韻にこそ爆発した。

そして、常識で考えれば、あまりに不思議なことではあるが、その音無き世界にすら至高の価値が存在していたのである。

音楽は時として、人の心の深奥に達し、その者の魂を大きく揺さぶる。曲が持つ力と奏者の能力が調和した時、その影響力は抗しがたい。それは身分や人種はもとより、国家すら超越する。その時のもはや、神の声に等しいものだ。

ニキルの技と「ダイバハル」の世界観は完全な融合の下、その域に近くもあり、彼の弾きを持つ独特の“枯響”が一層わびさびを深め、人々を魅了し尽くした。

夢から覚めたような王が、ようやく長く続く拍手の一拍目を打ち鳴らした。

そして、まさしく万雷。

呼び水となった王の拍手に間を置かず、広間に居並ぶ全員が、いてもたもたらず狂喜したように拍手と最大の賛辞を贈り続けた。

ニキルは皆に深々とお辞儀し、優美な面持ちに似つかわしからぬ堅硬な沈毅さを払い、この上なく燦然とした笑顔を持って応えた。

賛嘆の嵐もようやく落ち着き、王はかしこまって膝を着くニキルに声をかけた。

「真、古今稀に聴く演奏よのう。

そちの噂は遠の昔に聞き及んでいた。余も楽の横好きが高じて、ようやく一端に弦楽器を扱えるようになったが故、実はそちの名高きシタールを一度聴いてみたいと思っておったのじゃ。

ただ、数年前より放浪に出てばかりとも聞いておったのでな、隣国の楽士に無理強いもできまいと思っておった。

しかし、今回はわが国にとって重要な記念祭じゃ、何としても花を添えてもらおうと思つたのじゃよ。

その甲斐があつたわ。

当代随一と言つてしまえば、老ラウディカーン辺りに文句を言われるであろう故、口にせぬが、しかし追隨する技量がある。

その歳で、ここまでの境地に至るは、そちの天禀のほどを如実に示しておる。その才に溺れず、よくここまで練磨した。

そちは楽史に名を残すべき奏者よ」

「おお、何ともつたいなきお言葉、身に余る光栄にございます。

王よりの御褒詞、私にとりまして何よりの褒美に存じます。

しかし、老師にはまだまだだと、厳しいと指摘をいつも受けております。」

ニキルは物柔らかな言いようで返した。

「ふうむ、あの男のことじゃ。さもあるう。何度か会ったこともあるが、あの齒に衣を着せぬ物言い、煙たくはあるものの、不快を通り過ぎて逆に小気味良いわ。」

じゃが、師として宮廷楽士には呼びたくないな。マイソウレの藩王のように楽器をぶつけられたくないからな」

ラージャン
王は機嫌良く大笑した。

ニキルもつられて笑みを浮かべる。

老ラウディカーンの逸話は枚挙に暇ない。ラージャン 王の言う話もその一つだ。

指示に従わぬマイソウレの王に業を煮やした老師が、サランギーを藩王目掛けて投げ付けた話は有名だ。さすがに怒気を発して顔色を変えたマイソウレ藩王を、老師は覆い被すように大喝し、懇々と説教した。その迫力には、その場にいた誰も止めようがなかったと言う。藩王の態度が改まったことは言うまでもない。その分、精進が効して、藩王の腕前はかなりのものと評判になった。

インダーナ音楽の真髄は即興にあるのだが、ある時、ラウディカーンを含む三人の名手が複数のラーガの弾き比べをした。

ラーガとは簡単に言えば、旋律であり規則である。その規則に忠実に沿って、即興でこの音楽を表現するわけだ。規則に乗る限り、同じラーガでも奏者によって、音の使いがコロツと変わるものである。

基本的ラーガに始まり、次第に複雑で難解なラーガへと題目が矢継ぎ早に変えられていく。これには名手とは言え、元より無茶な変えようをされるので、繋ぎがどうしても破綻するのは止むを得ないものだ。しかし、ラウディカーンのみは、平静な表情でつまづくことを知らない。どうして、あのわずかな時間で流麗な音を紡いでいけるのか、皆不思議だった。

そして、弾き比べの終了後に言った言葉がふるっている。

「これは遊びだよ。だから、余計に気張ることなく思いつくまま、

指に任せるのさ。こんなものは考え過ぎる方が、無駄だ」

これだけのことを遊びではできない。少なくとも普通の奏者には、自分にも共通するところがあると、ニキルは思う。師とは似た者同士だ。ただ、自分は必要な時に自制しているだけ。

ニキルはわずかに視線を揺らし、視界を広げた。王との和んだ会話とは裏腹にニキルの目は、王を中心として冷徹に周囲を細かく観察している。

歴戦の太守を何人も見てきたが、さすがにトゥルバンの藩王は武人然とした風格が違う。他の藩王も王とした風格は確かにあるが、放蕩めいた緩みがどうしても滲み出ている。

しかし、この王は一代で小国をここまで大きくしただけあって、虎と向かい合っているような圧迫感を無意識に放ってくる。くつきりと濃い両眼は絶えず炯々とし、鉤爪のような鼻と見事な髭を蓄えた口の造りも、堂々とした印象を与えていた。

ただ、壮麗な王宮に対して、身に付けている物は華美なものではなく、質実剛健を思わせる。帯剣も他の王侯のように金や宝石で必要以上に飾り立ててはいなかった。そのため、見栄えのみで言うと、藩王らしからぬものであろう。

隣の王子もその資質を受け継いでいるようだが、まだまだだ。歳は、二十後半か。明敏さはあるものの、威厳が付いて来ていない。こればかりは年齢と経験が必要だ。

ここからが問題だ。
王の後背と左右に控える護衛と側近、揃いも揃って鍛え上げられた体格と精悍な顔付きが、嫌でも目に付く。

腰帯しているカンダ（両刃直剣）は、中・近どちらのレンジでも素早く立ち振るえる実戦的な造りで固められている。

剣同様に、ラーガに浸った後でも全員、油断ない表情と張り詰めた雰囲気は崩れは無かった。

いい人材を揃えている。優秀な難物ばかりだ。
思わず感心した。

だが、気になるのは、特に背が高くピンととがった顎鬚と厳しい面長が特徴の男だ。

その男は色んな意味で、できる奴だと、直観が告げていた。他の者は武のみだが、この男は素晴らしく理知的で物事を透徹する光を、その目に湛えている。

怖いタイプだ。結して用心を欠かしてはいけない。

目を合わせるのは、一瞬一回のみ。

王が右手を軽く差し出し、一言投じた。

「柄を

ラッシュン

王が相手の差し出した剣の柄に触れると言っているのである。

それは、「近臣に等しき意」を持つほど相手に気を許すという特別な表示行為である。通常は、士族など身分の高い者同士で行われるものであり、楽士対象ではあり得なかった。周囲がざわついたのも道理。

よほど、ニキルを気に入った証拠だろう。シタールの才だけではなく、貴族を凌ぐ気品と華麗さ等、溢れる人間的魅力も要因の一つであることは、間違いない。

今は約七mの距離。仮にここから殺到しても、周りの護衛が必ず壁を作り得る。蹴散らすこと自体は、無論可能だが、その間に王は逃げて、入れ替わりに兵が雪崩れ込むだろう。さすがに命取りになりかねない。無理をしても成否は五分五分だ。

しかし、王は手の届くところまで来いと言っただ。それには動悸が速まる。目の色もわずかに変わっただろう。しかし、この距離と室内の明るさでは、この微妙な変化に気付きはすまい。例え、気付いても普通の反応か。驚かない楽士はいまいよ。

とは言え、面長の男に目をやる危険は冒せない。

「はっ、真に恐れ多いことではございますが、

「構わぬ、近う寄るがよい」

ニキルの言葉を遮るように王が継いだ。

深奥に棲み付く闇が疼き出す。

では、と一揖し、ことさらにゆっくりとうつむきかげんに王の方へと足を進めた。

一歩一歩踏みしめる足裏にペルセアの厚みのある絨毯は妙に心地良かった。深みのある赤と淡い黄色を中心とした細やかな幾何学文様が、足元を川のように流れていく。その緩やかな流れが、王を確実にこちらへと引き寄せているかのようなイメージを結ばせる。

約三mのところまで止まり、片膝をつく。そして、さらにその半分をにじり寄った。

視線を上げ、王の胸元辺りに据える。その広い視野は、護衛たちの姿を完全に捕捉する。内心苦笑を禁じ得なかった。

面長の男は、いつの間にか位置を変え、王の左後方に配し、しかも体を微かに斜に構えている感じではないか。分かる者が見るに臨戦態勢と言っても過言でない。

こちらの一挙手一投足を見極めようとしているのだろう。最初に睨んだ通り、この男は他の者とは違う。

奴の抜き打ちは迅速を極めるだろう。見切りと体術だけで、その剣先をかわせるだろうか？ 極力、短剣でいなす危険は避けたいところ。あのタワーは身が厚そうだ。

ニキルは右手を腰帯の短剣へと伸ばした。

ニキルの意識の中で、それはスローモーションのようであった。

彼の体から銀光が迸る。と、同時にその姿は飛燕の如き速度で霞んだ。

周囲の護衛は事態に気付きながら、姿を目で追うが、体は即時に反応できない。

しかし、唯一長身から繰り出された凄まじい斬撃は、迫るニキルを完全に捉えていた。斬り上げられた刃は、血煙を舞わせるはずだった。

その時、ニキルは旋風と化し、回転しながら紙一重でかわしつつ、王の右手を駆け抜けた。

手中の短剣はたっぷりと血を吸っている。

ジジ・・・傍らの灯火が揺れた。

ニキルは必要以上にゆっくりと、カルギトの柄を王の前に差し出していった。

瞬く間に展開していた撃剣シーンは、ニキルの頭の中にだけ繰り広げられたものだった。

獲れる！だが、まだだ。

恐ろしいほどの憎悪の猛りを必死に抑えながら、自分に言い聞かせた。

まずはタグのソターののように相手を魅了し、完全に油断させるのだ。最初から選択肢を絞る必要はない。自分個人の復讐で、できるかぎり類を及ぼしたくはない。それが本心だった。

王はさつと柄に触れ、ニキルは来た時と同じようににじり下がった。「しばらくは逗留するが良からう。そちの演奏をもっと聴かせてもらうぞ」

「はっ、喜んで弾かせていただきます」

ニキルは深々と頭を垂れ、大広間を退出した。

その姿をじつと見送っていた面長の男が口を開いた。耳元で小さく、

「王
ラージャン

「良き演奏であったの。うーむ、どうしても欲しくなったわ。あれほどの名手はそうそう出ぬぞ。そう思わぬかラフマンよ」

いつもより低い声で王に問われた面長の男、ラフマンは答えた。

「確かに手練ではございますな。ただ、あの者、少々楽士らしからぬ雰囲気を持ち合わせておる気がします」

「さもあるう。傑出した才を持つ者は、往々にして異風を帯びるものよ。身ごなしの華麗さは、そこらの貴族も及ぶまい。あれは生来のものであるう。結して身に付くものではない」

「・・・率直に申し上げますが、あの隙のない姿勢と揺らぎを見せぬ緻密な動きは、相当に訓練された戦士のようにも思えます。

それに控え目とは言え、あの者より滲み出る気も純粹な鋼のよう

に硬質で、ひとかどの若武者を思わせるよう。高名な楽土故、考え難くもあるのですが、刺客の可能性が……」

「無いとは言い切れぬか？ 直感かね？」

「はい、確証はございません」

「フツ、相変わらず聡いのが、そちは。」

上手く隠していたつもりだろうが、あの者の目の奥底には昏い熾きが灯っておったわ。しかし、そうだとしても単なる刺客ではあるまい。確かに闇を抱えてはいるが、澱んだ臭みも刺客特有の酷薄な殺伐感も一向に垣間見えぬ。仮に余を狙ったのことにするならば、個人的な恨みか。しかし、高名なニキルに憎まれるようなことをしたかのう？ いや記憶にないな。

まあ、余に向けられたものとも限るまい。あの者の胸中に長年積み積もってきたものが、かような性情を作り出すこともあるうよ。それはそれで、憐れなこと。が、逆に言えば、あれほどの弾き手になるには、その心に神を宿すか、それができねば鬼を棲まわせねばならぬかも知れぬ」

そう言いつつ不思議な感覚を持ったのも事実だった。初めて会ったはずが、そんな気がしない。妙に懐かしい匂いがするのだ。

ラフマンは分かっていたが、王の眼力に改めて舌を巻きながら、「念の為です。調べさせますか？」

「ははは、無粋な真似は控えよ。今はな、奴が欲しいのだ」

ジャンルを問わず人材漁りは王の趣味でもあった。

「懐に、いつ牙を剥くか分からぬトラを飼おうと仰るのですな」

それに間髪入れず切り返す。

「それも一興ではないか」

王は迫力のある笑みを、口元に湛えた。

ラーガ「ダイバハル」(後書き)

話の中に出てきた「タグ」とは、インド亜大陸を舞台に実在した盗賊の一種であり、カーリー女神を崇拜しつつ、代々500年間に渡って2000万以上の人間を黄色いハンカチーフで、絞殺しつつけた殺人秘密結社(宗教団)のことです。ソターとは、その中で相手を油断させるホスト的な役割の者。

青き都 パンキード

「眺めに浸る気分でもないか」

城を出たところ、鼻をくすぐるマツリカの芳香に誘われた青年は足を止めた。

そう独り語ちた彼の眼下には、旧市街から新市街へと今も拡大するパンキードが朝日に照らし出され、早くも人々の発する雑多な熱気を伝えるかのように活気付き始めている。

トウルバンの城都パンキードを含むラハパル地方は、西カルタン砂漠の東外縁に接する為、乾季には砂塵やパドゥーと呼ばれる乾いた炎風にほとほと悩まされるのが常だ。しかし一方で、大河インガナルを擁することから、豊かな緑の勢力が勝って砂漠化の侵食を免れているのは、何よりも幸運であろう。

元々この都市は、地理的状况から古くは東西の交易要衝地の一つであったと同時に砂漠の戦闘部族に睨みを効かす砦の意味合いがあった。

それなりのリスクはあるものの、やりよう次第では、利益の大きい領地であった。インガナルはその流域に肥沃な土地も育む。恵みは砂漠化を凌ぐだけでなく、多くの作物をももたらした。

そして、別名（青き都）と呼ばれるパンキードは、防衛能力も高き為に藩都として選択されたと言われている。実際は、それらだけが理由ではないが。

都市を囲む壁を突破しても、入り組んだ路地は、城に近づくにつれ細まり、進入した軍勢が一気に城へ攻め入ることができない造りになっている。石造りの建物には、火も効き難い。さらに急な斜面の丘に立つ城をめぐらせている城壁は鉄壁であった。

また、この都市が（青き都）と呼ばれる理由については、城壁に囲まれた旧市街の中を歩いていると、早くも明らかになる。

商店や家など建物全てが、文字通り青く塗られているのだ。これ

は遠い昔の身分制度の産物である。指導的地位にあつた僧侶階級の家を区別するように青く塗っていたらしい。

大通りから路地に入ると日陰となつて、苛烈な日射を避けることができるが、滞留している空気は、狭い空間で異様な熱気を溜め込んでいて、大通りとは別の暑さが人々を苛む。そんな中、鮮やかな青に囲まれていると、気分的に少しは楽になるものだ。

さらに眼前にそびえるランガル城の方へと上つて行き、麓まで来て振り返ると、青い町並みが、気持ち良いくらいに広がっている。

旅人は決まつて、ここでふつと一息つくのだろう。

そんな人々を尻目に青年は優雅に坂を下つていた。

身に着けているのは民族衣装のクルタだ。シルクっぽい光沢のある白地に淡いくすんだ金色で葉っぱをあしらつた模様が全体に広がっている。胸から襟元までは刺繍で細かな模様で彩られており、立ち襟も同様だ。簡素だが、落ち着いた品のある風合いである。

頭のダーバンは小粋にかしげ、今流行りの巻き方でござっぱりと整えていた。

香をどこかにはたき込んでいるのか、すれ違う人々の鼻を仄かな香りがそつと掠める。

貴人ではないが、それ以上の品位を微風のように運んでいた。上流階級の持つ厭味や虚栄じみたところはなく、早朝の涼風を思わせる爽やかさをさり気なくまとっている。

それに気が付いた人々が、振り向くのも道理であろう。

一昨夜、ラーガ「ダイバル」を名演したニキルである。

祝宴が続く一週間は、城内の客舎をあてがわれていた。無論、気に入った者にのみ特別にだ。その他の大半は、町に宿を取っている。

これは幸先良いと言うより、順当に第一段階を終えたと、彼は考えていた。その次は、どこまで信用させられるか。そして、王に宮廷楽士として求めさせられるかだ。

明後日の夜も別途召されている彼は、今現在の町の声を生で聞い

ておく必要があつた。

領主は、自領の成功している施政について、話に上るのを決して悪く思わない。逆に語るに相応しい知識人と会話するのを好むものだ。

単なる楽士だけではないという部分も売り込めば、それだけ個人としての魅力を高めることができるだろう。王の人材漁りは、遠く聞こえていた。が、目は肥えているだけに底の浅いものには、手を出さないのも事実であつた。

情報の付け焼刃は避けたいところだが、ニキルには各国への放浪がもたらした知識と経験がある。部分的にでも本質を見抜けば、十分に相手をする自信はあつた。

平地に下りて、路地から通りをしばらく行くと、サルダルマーケツトが続いている。

市場の賑わいは早い。

朝の涼しい内から、野菜や果物など生鮮食品を選ぶ人々が繰り出していた。

しかし、やたら男の姿が目につく。

ニキルはシャンプルという小さな店で、ラツシーを頼んだ。ラツシーとはヨーグルトと水を主として、糖類、バニラエッセンス、塩・スパイスなどを混ぜて作られたヨーグルト飲料である。一般的になり酸味はきついが、辛味のある料理が多いこの国では、水代わりにも飲まれる国民的飲料と言える。ただし、辛口のラツシーも存在する。

同じ国民的飲料のチャイには、ジンジャーの強弱があるものさすがに甘いのもオンリーだ。

自分より少し年上に思える店の者が、シナモンラツシーをテーブルの上に置いた。

「ありがとう。この町は景気が良さそうだね。他の国と比べても活気がありそうだ」

話しかけられた店員は笑みを浮かべてうなずいた。（お客の顔立ち

からするとラジプシャンか？ 敵めしいのが多いと聞く割に、らしくない雅な感じだな」

「ああ、そうですね。元々が交易都市なもんで人と物の流れは多いんだけど、年々集まりが多くなっているって聞きますよ。」

今の王様は戦も上手いが、他藩や外国との交流を活発化させて経済的な取引を最優先に進めているらしいからね。しかも税の優遇もあるから、商人も多く集まってくる。ま、あんまり難しいことは知らないけど、少なくとも俺のじいさんの時代からすると、この町の大きさも何倍にもなってますよ」

「どうやら今の王の才覚によるところが、結構大きいようだ」

「ああ、それは間違いないと思いますね」

「他藩では貧しさに怨嗟の声を巷で聞くこともあるが、この藩の暮らし向きでは、誰も王に文句は言えないな」

「文句どころか、我々に見れば藩を豊かにしてくれた尊敬の的、逆に敵からすれば暗殺の的だ。ここまで来るには、色々あったろうし、友好国以外から見ると、この藩は脅威だろうから、敵も多いと聞きます。我々には、それが心配の種ですね」

自藩にとっては、噂どおりの名君ということが。ただ、ここまで来るには確かに色々あったな。

ニキルの目に微かな暗みが過ぎった。

奴を殺ろうとしている敵藩敵国の刺客も当然、この町に存在はするだろう。常に屈強の護衛を身边に侍らすのも不可欠なことだ。

必要とされる王は、もはや自分自身だけのものではない。藩国を構成する民全体の精神的な大きな支えであり、良くも悪くも実生活を左右させる力を持つ存在である。下々にとって、細かなことは分からなくとも、今の王が優れた為政者であることは、明白だった。その王が消えれば、この藩がどうなるのか？ そう考えた時、恐れと不安が生じるのも無理は無かるう。そうした立场上、個としてのみならず、全体のために自身を守ることと義務だ。

向かいの店で、母親と共に店番に立つ子供の姿が目に入った。手

伝いをしていっているのだろう。他藩に比べて、経済状態は良いとは言え、平均水準が飛び抜けている訳ではない。子供も労働力の一員として考えねばならないのは、ここでも同じだ。しかしここでは、最貧層ですら飢えは少ない。そうした人々への労働の斡旋と環境の改善。貧困層の底上げは、王が早期から執着してきた課題であった。無論、単なる慈善精神のみで為したものではない。それは、彼の遠大な国力強化政策の一端であったと言えるのだが、それを見抜く者は数少ない。

傍目には非常に成功している国造りも、様々な問題や矛盾を抱えていることは、否定しようの無い事実である。大なり小なり何かを得る為には、何かを犠牲にしなければならぬ。それは真理だ。

例えば、昔からあった利権を潰し、開放や分配を強制するに当たって、多くの喜びだけを産みはしない。失った者の恨みは、そここの間に息づいている。その摩擦が、水面下で大きな炎塊となつて、危うく表出する水際で鎮火させたこともあった。

しかも、その機に乗じて、反乱分子に手助けをした他藩に、大義名分を得たとばかり速攻で領地の三分の一を攻略した手際は、異常なほどに的確で迅速であった。戦の準備が不完全であったその相手方は、手も足も出ず崩れ去った。

当時、体力がまだまだ十分で無かったトウルバンを虎視眈々と狙っていたボンダル藩。防衛面での戦略から、どうしてもその戦力を削いでおく必要があったのは周知のところである。

その同時期になされた富の集中を緩和させる国内改革。不満と反発はシナリオ通りであり、既得特権が奪われる階層の耳に危険な誘惑がいずれ吹き込まれることも、想定範囲内であった。

不穏な動きのある中、機先を制してボンダル側を手引きし、国内の元特権階層に橋渡しをしたのは、実は王の手の者であった。元特権階層が話に乗らなければ、それで構わない。内情として、そこまで危険ではないということの証になる。しかし乗れば、一挙に懸案の両者を潰すか、力を減じさせることができる。

現実には、話に乗った。だからこそ、逆に裏でボンダルに攻め込む準備は着実になされていたのである。

そして、史実にあるように、事は王の計画通りに進んだ。

この策は軍師サンギルの進言によるものであるが、敢えてその策を取ったのは王である。このことは、時として善人であることだけが、藩王として必要な資質であるとは、決して言えないことを如実に物語っている。老獪や狡猾さも荒波の舵取りには、どうしても必要なものなのである。それは一種、再生や成長を促す破壊にも類似する感があった。

しばらく世間話を続けた後、ニキルは店を出て容赦無い日差しに目を細めた。そして、再び雑踏の中を歩き始めた。

悠久なるインガナルの誘い

市場には男の姿が多く見られる。この国では買物物は男の仕事なので不思議ではない。女性のサリーを見立てる男性を目にするのも当たり前前の光景だ。

彼らもたらず雑多で喧騒感に満ちた活気は、どこの藩国でも似たり寄ったりだ。時に独特の風土に彩られたこの国民性は、絡んでくるような粘性ある執拗さと厚かましいほどの無遠慮さ加減が特徴で、遠い異国の旅人たちからしてみれば、鬱陶しく感じられることも少なく無かるう。好感を持つか、そうでないか両極端に分かれると言つのも納得だ。

「よお、その兄ちゃん、安くしておくよ。どうだい？ あんただよ、男前。ほら、白いクルタを着た、小粋なターバンの。あんた、この人じゃないだろう。旅行かい？」

初め自分に声が掛けられているとは、気が付かなかった。あまりに無遠慮な口調なので、別の人と会話でもしているのかと思つたからだ。

思わずきよとんとした顔で振り返ってしまった。人通りに紛れた小さな露店に色の黒い半裸の老人がニタニタ笑いながら、こちらを向いていた。そして、手に持った何かを振り回しながら畳み掛けるように話し続ける。

「そのクルタにこのベストはとても合っているじゃないか。30ピルパに負けておくよ。さあ、持ってけ持ってけ。若いもんが遠慮するんじゃない。何じゃ何じゃ、その気の抜けたような顔は、暑さにもやられたのか？」

苦笑を残したニキルは颯爽とした足取りで、人ごみを縫って行く。老人の追いつがる様な掛け声は、すぐさま賑わいに埋もれた。

ニキルは鍛錬と用心を欠かさなかった。スリの手を払うのも三回は数えた。しかし、そんなことの用心ではなく、付けられていない

かという点に対してだ。雑踏にあつても不審な者を見分ける、感じ取る鍛錬は絶えず続けてきた。仮に相手が子供であつても、不意打ちされれば危険に陥る。獲物が小さな針でも毒が塗られていたら、それで終わりなのだ。

城内では、何となく視線を時々感じて仕方が無かつた。

ラーガ“ダイバル”を演奏して以来、奏者としての自分に明らかな視線を向ける者が多くなったのは事実だ。しかし、それだけではない別の探るような視線を感じたのもまた事実だった。それに気付いてニキルが視線を向けても、こちらを見る者はいないのである。やはり、藩王に気に入られたが為の監視である可能性が一番考えられた。シタール奏者として名が通つていても、所詮は放浪を好む一楽士に過ぎないのだから。

特に政治情勢に追い討ちがかかつている、このご時世だ。あちらとしても当然、用心は欠かせないだろう。

西方の大国ロンガルドからの政治的なちよっかいが増えていることもあり、ここ近年は各藩国の間でも緊張が高まりつつある。このナデイル亜大陸のほとんどの藩国は大局を見ずに、自藩の目先を追うばかりだ。愚かな藩国の中には、漁夫の利どころかロンガルドと結託しようとするものまでいる。ロンガルドの戦略目的がどんなものかを冷静に見抜くことができれば、それには乗れまい。結託と言うより、隷下である。

トゥルバン藩王は、差しさわりの無い外交を進めつつ、他藩国に反ロンガルドの重要性を内密裏に説いていた。遙か東方の遠国では、ロンガルドの植民地政策的にされて、抜き差しなら無い状況に陥っている国があるという情報も耳に入ってくる。甘言を弄していても、その裏で何を考えているか分かったものではなかつた。

そんな反ロンガルドの首魁として目を付けられつつあるトゥルバンには、ロンガルドの間諜が商人に化けて、入り込んでいるとの噂もある。その筋のルートでは確かな情報らしい。ただ、対ロンガルドの情報は、まだ市井には伝わらない種類のものではある。

そういう事情で、先進の軍備を擁し、合理的で手段を選ばぬロングルドからも狙われていると考えていた方が良い。つまり、以前からの敵対関係にある藩国だけでなく、さらに厳しい相手と対峙していかなければならない状況へ押し流されているのである。

ニキルは時折、メインの通りを折れて路地の店も見て回るように動いた。どちらかといえば、旅人より現地人向けの店舗や住居が多くなる。道も細くなり、入り組んでいて迷路のようなので、前後の通行人の確認はし易くなる。そのためでもあった。

数年の放浪生活の中で、裏の世界も少しは知った。用心深さも、その中でさらに練られていった。そして、そうした世界の情報を仕入れるルートとのつながりもいくらかは作っている。そんな中で見知った顔を、入り組んだ裏路地で見かけたのは少なからず驚きだった。

メイン通りから三回目路地へ入って町の東西を走る少し大きな通りに出た時だった。日に焼けた怖い目つきをした頑強な顔立ちが印象の男で、背は高くないが、がっしりとした体躯の持ち主だ。何よりもその腰の置き方と無駄の無い足運び、そして絶えず即時対応可能な体幹バランスを保っている姿勢が、只者でないことを如実に物語っている。

一瞬、こちらに目をやったが、表情に変化は無かった。面識は無く、以前こちらが顔を見ただけなので、向こうは知らないのだろう。こちら相手も相手の素性は全く分からない。

少し離れて、すれ違った後に視線を感じたが、無視した。少なくともトウルバンの手の者ではあるまい。関わらない方が得策だ。

さらに3回、大通りからの路地裏巡りを繰り返した。当然ながら入り組む路地裏先にある商店は少なく、喧騒の薄れた中で全般的に鄙びた感じが、ゆっくりとたゆたっている。

そこを進むニキルに、自然と住民たちの視線が向けられる。「迷ったのか？」と声をかけてくる者もいた。確かに服装を見れば、地元のものではないし、観光客はこんな所まで来るとも珍しい。城の

者に付けられていたら、逆にこんな路地裏に入る者は怪しいと見られるかも知れない。ニキルは時折、声を掛けては世間話の中で、さらに市況を仕入れていた。どうやら藩同士の確執は知れていても、真の暗鬱たる政治情勢は、それほど衆庶まで届いていないようだ。彼らは、迫り来る足音に耳を澄ますこともできない。

得たい情報を大まかながらも手に入れたニキルは、歩速を早めて人ごみの中を風のようにすり抜けていく。そんな中でもニキルのしなやかな動きは、優美さを失わず、流水に浮く木の葉の様に眼前を阻む人々を軽やかにかわし続け、賑う市場の密集度に関わらず他の人にかすりもしなかった。

ニキルの研ぎ澄まされた感覚は、人の発する臭いや温度が彼の体表を滑るように触れるのを逐一感じ取っていく。それと共に過ぎ行く周りの人々や光景が色彩を帯びた流れとなつて、全ての生活音はうねりを持ち始め、過度な音階は丸みを帯び、意思を持つて調和に向かおうとする。

そうして彼だけの世界が構築されていく。この時の彼には呼びかけに反応しにくくなつてしまつたが、人の発する気には特別鋭敏になる。意識と無意識の狭間の中で、特殊な感覚が彼を支配していた。

幼少の時、経験した死と生がせめぎ合う地獄図がトラウマとなつて、内在する精神的不安定さが、長い年月をかけて彼の精神空間に特異な領域を作り出した。その領域が日常にも大きな影響を及ぼしていたのである。カルギトと交感した時に見せられた「魔界群像」もまた、それが生み出した狭間の世界だつた。

そして、気が付いた時にはずいぶん遠くまで来ていた。昼を過ぎ、日も傾きかけている。

乾いているはずの空気に水の臭いが微かに混じつていた。ふと、それに気付く。

空は快晴だ。雨の予兆ではない。

インガナルが自らの存在を知らしめているのだ。

通りに連なつてい建物は切れることなく続き、その向こうに悠

久なる大河がその偉容を現した。その流れは滔滔として余りにも大きく、どこまでも続いているかのように先は霞んで地平線に溶けていた。川の際まで立ち並ぶ建物も、岸に沿って延々と続いている。

町と河の境界である河べりには、石で作られた階段と踊り場が整備されており、人々はそれを利用して河で沐浴をしている。インガナルは大いなる母であり、河自体が神聖な信仰の対象でもあった。死期を悟った人々は、この河のほとりで死を待ち、茶毘に付された灰は母に流し還されるのである。

大人に混じって、浅瀬で遊ぶ子供たちの歓声が色とりどりに響く。濁った水は決して綺麗だとは、言いがたい。しかし、この地の人々にインガナルは身近な存在であり、太陽や風のように当たり前であり、とても大切な欠かすことのできないものである。

不意に日が翳った。厚く大きな雲が陽を過ぎつたのだ。色の種類は乏しいものの鮮烈だった彩度は身を潜め、周りの景色の色彩が急に生氣を失う。焼けるような気温もふっと和らいだ。

遠くの景色は浮き上がって見えるほどに陽の光を存分に受け取り、自分がいるこの場所が別世界に思えるような対比の激しさで、目が眩むような感覚に捉われた。

石造りの建物は淡い金色の輝きをまとうが如く、陽に焼かれています。砂を含んだ空気は熱によって、さらに霞み、目にするもの全てを揺らぎ惑わせる自然のフィルターと化していた。

再び、自らが立つ影の世界へ視線を戻す。

遮る雲の巨塊は、今だ去らずに圧迫感を伴って下界を睥睨して

た。

水面もベールを被せたように反射無く暗みを増す。

河で親を呼ぶ子供の声が、ニキルの耳朵を掠めた。

歓声にも似たその声は、悲鳴にも似ていた。いつかどこかで聞いた記憶が、暗い闇淵の底から躍り上がってくる。

その瞬間、彼は故郷のあの時のあの川辺に立ち返っていた。

戦争の落とし子

夕暮れの空は燃える様な紅蓮に染まり、烏のシルエットが不吉なほどの数で上空を飛び交う。下界には夕闇が徘徊し始め、茜と黒のせめぎ合いがそこかしこで繰り広げられていた。

血と鉄と煙の臭いは、逃げても逃げても、そこら中に満ち溢れている。焼き打ちされた家々の窓からは、炎の舌が外の空気を求めて下品に嘗め回し、天を焦がそうと貪欲にもがいていた。

辺りには無残な姿になった村人たちが、永久に口を閉ざされて、ある者は地を凝視し、ある者は無念そうに天を仰いでいる。無論、その目にはもはや何も映らず、生気の欠片も無かった。

遠くでは人の悲鳴や子供の泣き声が絶えず、それを追う様にして野太い怒号が覆いかぶさる。

少し離れた所では、剣をガチャつかせる兵士の足音が、生き残りの者を求めて辺りを彷徨っていた。

一緒にいた者は、もはや一人だけになってしまっていた。少年に剣を教えてくれていたシングである。その彼も手傷を負い、左肩から脇腹にかけて血が幾筋もこびり付いていた。かつての力強く快活な表情は片鱗も見えず、虚ろに落ち窪んだ目は死相を帯び、荒々しく押し殺した息も死臭に似ていた。しかし、少年を守る様に抱くシングの体臭だけは、いつもの剣の鍛錬をしていた時に嗅ぎ慣れたものと一緒で、わずかながらも安心感を与えてくれた。

川を渡ろうと岸边に辿り着くと、同じように考えた村人たちの成れの果てが惨たらしく点在していた。陰と茜の競演が少しはその惨状を隠してくれたが、運悪くまともに夕陽が照らした彼岸の形相の数々は、逆に恐ろしいほどに末期の声無き叫びを炙り出され、少年の精神に決して消し去ることのできない楔を深々と打ち込んだ。そしてそれは、一つ一つ破滅への大きな亀裂を生じさせていった。

振り切るように転じた視線の先には、上流から流れ着いた軀たち

が、ここの浅瀬を終の寢床と決め込んだかのように夥しく密集している。ここに来るまでと同様、自分と同じくらいの歳の子供の姿も目に入った。それは、蠟のような目でこちらを向いていた。もう逃げ場は無い、お前たちもこちら側に来い仲間になれと、誘うように死屍累々が行く手に待ち構えていた。

この時、精神的な決壊を必死に堪えていたニキルは思わず泣き出してしまふ。家族はもういないのだ、死者の誘いを受けても、もはや構わなかった。

獲物を嗅ぎ付けた餓狼の如く、その声を耳にした三人の敵兵が現れ、二人の方へと大胆に歩を進めてくる。夕陽を受けた髭面は異様に目をぎらつかせて、どれも殺戮の狂気に酔っていた。

シングの判断は早かった。隠れていても直ぐに見つかるだけだ。幼い少年を抱かかえて川の中へと走った。

その背に下卑た叫び声を浴びせながら、タワーを振りかざす兵士たちが殺到する。

シングは一縷の望みをかけて、少年を川の流れの中へと放り投げた。今の自分に三人の兵士を向こうにして少年を庇う余裕は無い。

泳ぎも教えていたが、もはや生死は天任せにするしかなかったのだ。剣を抜き振り向いたシングを、三人が取り囲もうと散開した。

右手の兵士に狙いをつけたシングは、流れに速度を殺されながらも巧みな剣捌きで相手の攻撃を受け流しざま、一閃で血海に沈める。

技は一瞬の冴えを見せたものの、積み重なっていた疲労と手傷のダメージは、シングの動きに急激な止めを刺した。

残った二人の兵士が繰り出す連撃を捌き切れず、川の石に足元を取られたシングは体勢を崩してしまふ。そして、すかさず致命傷を受けた彼は川に没する瞬間、振り返って闇に溶け込んだ川下へと目を向けた。もはや見えるはずも無い少年の姿を追って……。

左掌の痛みが、ニキルを程なく現実を引き戻した。

幕が開くように町は再び光に照らし出された。インガナルも煌めきに溢れ、止まっていたかの光景は動き出した。それと共に焼け付

くよつな感覚が甦り、強烈な陽光の下にいる自分を認識した。現実
は夕暮れ時ではなかった。子供たちの声も悲鳴ではなく、歓声だっ
た。

現実的な感覚が極めて強かった戦争時の光景から立ち返った今、
あまりの劇的な変化に僅かな時間だが、呆然としてしまった。

痛みを訴える左の掌を見下ろす。

それはカルギトを納めた鞘を関節が白くなるほど強く、そして鞘
の縁が掌にきつく食い込むほどにしっかりと握り締めていた。

例え、いかなるつながりであろうと、カルギトは彼の精神的根幹
を支えるものの一つだ。あの時の戦争によって、大きく変わってし
まった彼の人生。全てを失い、己のみを信じて生きていかなければ
ならなかった彼のアイデンティティーを唯一示してくれる存在がカ
ルギトだった。そして、この歳まで最も長く共にあつた相棒でもあ
つた。彼らには決して譲れない共通の目的がある。トゥルバン藩王
の命であり、この国の滅亡だ。

同じ報いを受けさせなければならぬ。絶望の中で一人残された
彼のたった一つの切望が、何ものにも屈せぬ力となって自身をここ
まで生き延びさせたのだ。

不意に目の前の全てを破壊しつくしたいほどの衝動が内面で爆発
する。例えることのできないほどの憎悪が、何ものかが胎動する深
淵へ引き込もうと巨大な腕を天へと衝き上げた。

この国は無数の屍の上に興隆を続けている。これは紛れも無い事
実だ。自らが目にし、体験してきた修羅界。そこには何の差別も無
く平等な死が止め処なく蹂躪していた。

それならば、当然のこと報いを受けなければならないではないか。
屍の上に築かれた都など、いずれ死者のものになるべきだ。

生者の活気が溢れる王都トゥルバンの歴史的地下には膨大な死者
の群れが密かに佇んでいる。王都を見上げる死者の眼は真つ黒な空
洞だ。そこには例えようも無い怨嗟が渦巻き、地上にある生者の世
界を死都と化すべく渴望に満ち満ちている。

不意に子供の嬉しそうな歓声が弾けた。

目をやると十歳くらいの男の子が母親に勢いよく抱きついているところだった。

母親は、その子を慈愛に満ちた眼差しと笑顔で見下ろしている。

微笑ましく思いつつも、ニキルの胸中に切なさが過ぎった。

あの時以来、彼は本当の親の愛に触れることは無くなった。商隊に拾われて、奉公人兼護衛として育てられたのだ。

愛情が少なくとも親代わりになってくれた人から与えられ、仲間として自分の居場所があったことは、かけがえの無い贈り物だった。しかし、それですら戦火の燻りによって潰え去ってしまった。その後には才覚を現していた剣術の腕を頼りに流れの護衛として、様々な隊商に雇われた。そんな中、行き着いたのが奇縁によるラウディカーンとの出会いだった。

そして今に至るも、一日たりとも自らが為すべきことを忘れたことは無かった。

ニキルの目が再び、幸せそうな親子の姿を捉える。その深い愛情に彩られた姿を、まぶしそうに憧憬の眼差しで見送った。

今、ニキルには恵まれた才能とちよつとした名声がある。その気になれば宮廷楽士として、不自由ない暮らしが約束されるだろう。

しかし、絶えず居座る心の空虚さは、そうした物質的な何かでは決して埋まらない。それを知っていた。だからこそ、埋めてくれる何かを探すように放浪癖が芽生え始めたのかも知れない。

楽に対する賛辞喝采が一時的に彼の心を満たしてくれるが、それもまた本質的な渇きを癒すには至らなかつた。

それほど愛というものが大切だと言うのか。

幼い頃で真の愛の交流は止まってしまっていた彼には、いまいちよく分からなかつたが、仲の良い親子を見る度に心の奥底から、羨望の囁きを感じることは確かだった。

戦争と言うものが、自分のような愛を失った人間をどれほど多く生んできたのだろうか。

そう考えた途端、単純なことだが、ふと気づいた。

彼が生きている中で、の最たる目的は、トゥルバン藩王の命だ。そして、第二にニキルの故国の末路と同じく、この藩国の滅亡だ。藩王が死ねば、侵攻という名の触手が濁流と化して、押し寄せることは疑いが無い現状だ。現藩王の一枚岩は余りにも大きい。それ故に崩れれば、支えるに代わりの者がいないのだ。

ここは間違はなく、戦火に蹂躪される。

母なるインガナルは、彼の故郷以上に膨大な死者の群れる暗き彼岸の流れと成り果てるだろう。

今見た、幸せそうな親子はどうなる？

自らの容易な問いに、彼は即答できなかった。明白過ぎる答えに戸惑いがゆっくりと浸透していく。

切なくも憧憬の念を起こさせる親子の温かな姿が、自分が体験したような避けようの無い巨大な力によって、惨たらしく引き裂かれるのだ。

お前が求めるものとは、こういうことなのか？ 自分が味わったものを何も知らぬ平民たちにも味わえと言っことなのか？

内なる声の問いかけ。

何を今さら、馬鹿な！ それが戦争ではないか。人間の歴史で幾度と無く繰り返されてきた飽くなき強欲の結晶だ。平民にとっては戦争など天災と変わらない。どうすることもできない山津波のようなものだ。それに望むと望まざると、この藩にいる者は皆、犠牲となった死者の無念など気にもかけず、篡奪したものを糧にして生活しているではないか。それがのうのうと許される世界だと言っのなら、俺一人でもこの手で悉く滅ぼしてやる。

では訊こう、豪族の首領であったお前の遙か祖先が、前の領主や土着の民から奪ったものは何だ？

財産や土地だけではなかるう、いかほどの命を刈り取ってきたのだ？ お前の家系にとって収穫期が無かったとは言わせない。今お前が言ったように強欲の結晶は栄枯盛衰の中で、滔滔と連なってい

る。所詮、トゥルバンが興隆したのも歴史の中の瑣末事でしかない。ましてや、一豪族の滅亡程度の出来事など、現在に至るまで数え切れぬほどあった事象の、無視に値するものの一つに過ぎぬ。

馬鹿な！ 無視だと。死した無辜の民の無念はどうするのだ！

そう心の中で叫んだ瞬間、愕然とする。自分の先祖が収穫した糧で生きていた民は、今のトゥルバンと同じだ。

戦争と言う微塵の容赦も無い力が生むものとは何かを、深く多面的に考えるがいい。

うるさい！ はいそうですかと、簡単に捨てられるか。二十年の長きに渡って、俺の根底にあった欠くことのできない執念だ。それによって生かされもしてきた。剣技もシタールも、結局は全てそのために磨き上げてきたも同様だ。

その通りだ。そういった、お前のような歪んだ存在もまた、戦争がもたらした落とし子の一つに過ぎないのだよ。誰よりもお前が分かっていないはずだ。

地震のような激しい混乱に、自制し切れずニキルは頭を抱えて絶叫したかった。

今までの二十年間を唐突に捨てられる訳が無い。しかし、内在する矛盾は余りにも大きく、見過ごせるレベルではなかった。

彼は眼前の輝きに満ちたインガナルに、戦争によって地獄の如く変貌した故郷の川を容易に投影することができる。

血と死と炎と煙がもたらす阿鼻叫喚、そしてその後に来る常世の静寂。それをここでも再現するさせるということ。

強欲の結晶が連なっていくのと同様、悲劇という負の連環も終りなく永劫に続くのだろうか。

ニキルは、インガナルのほとりで過ごす人々をこれ以上直視することができなかった。断ち切るように元来た道へと振り返る。

そして、足早に歩き始めた。

一刻も早く、この場を立ち去らなければならなかった。

藩王の前でも、あれほどまでに煮え滾る憎悪を抑え込めただけが、

この理解不能な動揺めいた混乱は、この場にいる限り益々ニキルの心を鷲掴みにして、千切れんばかりに揺さぶり続けるのだ。

狂おしいほど頭を掻きみしり、絶叫したい思いがこれでもかと、大砲の連撃のようにニキルを激しく襲う。それらの強襲にニキルはこのまま自制を保つ自信は無かった。

黒く染め上げてきた強固な思いが揺らぐ。

ニキルは風のように群集を縫って、インガナルから逃れて行った。そんなニキルの苦悩を余所に、平和を謳歌する歓声と賑わいは、死者の都ではなく輝く陽を受ける都に相応しい生ける活気そのものに思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8201h/>

ニキル・アルバーナ ~シタールと短剣~

2010年10月22日11時25分発行